

江戸時代の小袖の文様と色彩の関係性

山口 遥

本研究は、江戸時代に作られた小袖の文様と地色に傾向や相関があるのかを調査することで、それぞれの文様に特に使用されることの多い色があるかどうか、江戸時代の日本人がそれぞれの文様に色のイメージをもっていたかを明らかにすることを目的とする。本研究における小袖とは袖口の小さく縫い詰まっている衣服のことであり、振袖や帷子も小袖として扱う。小袖の文様や色彩に関する先行研究には、小袖意匠、文様や色彩についてそれぞれ調査したものはあるものの、小袖に描かれた文様と色彩の関係を調査したものはない。

本研究では江戸期の風俗画や現存する江戸時代の小袖を用い、小袖の文様と地色の調査を行い、調査結果をもとに文様の傾向、地色の傾向、文様と地色の間の相関を調査した。本研究の調査には国立民族歴史博物館に収蔵されている「野村コレクション」から、館蔵野村正治郎衣裳コレクションデータベースにある小袖屏風 106 点と図録「江戸モード大図鑑」に収録された現存する小袖 231 点、計 337 点を調査対象とした。これらの資料について小袖の地色、資料の種類、制作された年代、小袖の材質、文様に使用されているモチーフなどの項目を設定し、調査を行った。

調査を行った結果、地色について使用されている色は 25 色、白が一番多く使われており、そのほか青系や紫などの寒色が多く使われており、先行研究と概ね一致した。また小袖屏風と実際の小袖で使用される色の傾向に差があった。また、文様について一番多く使われていたモチーフは松、菊、梅、桜、水、竹、鶴など吉祥を表すモチーフが多く使われていた。小袖の中には『源氏物語』や『伊勢物語』など、特定の和歌、物語を連想させるものも多く見られた。

出現頻度の高かった「松」、「菊」、「梅」、「桜」、「水」についてさらに調査を行ったところ、「梅」と白に関連があること、「菊」と白、「水」と白、青、紫が関連する可能性があることがわかった。このことから、江戸時代の人々は文様に色のイメージを持っていた可能性が高いという結論に至った。

(指導教員 綿抜豊昭)